

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆6月のありがとう☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

先月号のアンケートへのご回答ありがとうございます。多くの方が興味を持ってくださっていることがわかり、イベントへ向けての決意があらためて固くなりました。どのような形式、どのくらいの規模になるかについては後日ご報告いたします。

ありがとうございます。ここでお詫びを申し上げます。ゲストをお招きしてのイベントの開催時期ですが、当初7月～8月という時期で打診をいたしましたところ、「それは無理!!」という先方様のご返答がございました。ということで、10月ごろの開催で現在調整しております。誠に、申し訳ございませんが、ご理解の程、宜しくお願い申し上げます。

**誤解されている「国語」(最終回)**

こんにちは。4回にわたって書いてきました「誤解されている『国語』」も今月で最終回。というより、書き続けていたらきりがないので、ここでひとまず筆をおくことにしました。ただ、これからも、このIDOBATA会議やブログでも触れていきたいと思っております。その時はぜひお読みいただければ幸いです。

**7.音読は必要ない。黙読で十分だ。…音読には音読にしかない効用があります。**

母親が子どもに絵本を読んで聞かせてあげる。ごく自然な光景です。母親のこの行動には特に勉強をさせているという意識はありません。成長の初期段階において子どもはどこから言葉を学ぶのでしょうか。それは耳からです。文字なんて読めないのですから。耳から伝わる言葉が、子どもの周囲の物語と結びついて意味を形成し、それが知識としての言葉になっていくのです。それは子どもだけではありません。大人だってそういうプロセスを経てまだまだ言葉を知識化しているのです。

ことわざや慣用句、四字熟語など表現の習得について、今と昔で少し違うことがあります。「雨降って地かたまる」「猫に小判」「優柔不断」…昔の人は参考書がなくても、というより参考書なんてない状況の中で、こういう表現を日常の会話の中から意味づけし、知識としていきました。しかし、今はどうでしょう。ことわざ、慣用句、四字熟語などの表現は参考書で学ぶものという風潮になっていませんか。文字は音よりも記号的な性質が強いです。参考書を使って、記号化された表現を記号化された文字で結ぶという作業を繰り返しているのです。表現を理解するまでの手続きが長くなってしまいます。たとえば、昔からの表現であっても、なぜか今は苦勞して勉強しなければならないものになっているのです。

前置きが長くなりましたが、では音読の効能とは何か。おそらく言葉を理解するプロセスの簡素化でしょう。言葉だけではなく、文脈を理解するプロセスも簡略化しているでしょう。音に出して読めば分かることも、文字だけだと分かりにくくなってしまいます。音には不思議な力があるのです。というより、人間が言葉を習得してきた過程から考えれば音を聴く方が理解しやすいのは当然かもしれません。

しかし、今の子どもたちは音読をものすごく軽視しています。というより、嫌がります。嫌がる根拠は分かりませんが、目で読むだけでいいと思っています。

文系の大学の授業には文献を講読するものがあります。大学の先生の中には学生に音読をしてもらってから内容の検討に入る先生もいらっしゃいます。古くは江戸時代の寺子屋は子どもたち全員に音読をさせていました。声に出すことの大切さは昔も今も変わらないのではないのでしょうか。

文字だけではつかめない風景も、音にすると目に浮かぶものもあります。ラジオから流れる人の言葉はなんとなくその風景を頭に思い浮かばせてくれます。音のもつ力でしょう。この力を使わな

いのは本当にもったいないです。せめて学校の教科書ぐらいは音読をしてみませんか。学校の教科書の作品にはいい作品があります。それを音にして味わい、理解につなげていければ、いわゆる学業における成果も期待できます。算数の文章問題も声に出して読んでみてください。文脈がわかれば、何をしたらいいのか、問題を解決するための方向も見えてきます。目で読むだけでは見えないことも、音で見えてくるのです。

## 8.この辺でいったん「まとめ」

もう4ヶ月でしょうか。7つの話を書かせていただきました。書いていた私も何を書いたのだろうと、ふと見直してしまいました。国語の設問の解答について、読むことについて、書くことについて、国語の勉強についてといろいろ書き並べていました。いろいろ書いてはいたのですが、ちょっとふりかえって国語を学ぶとどんないいことがあるのでしょうか。ここでいう「国語を学ぶ」とは今回の7つの話をふまえてのもです。ちゃんと国語を学べば、国語という教科だけではなく、ほかの教科も理解できるようになります。国語で得た力や学び方によって、ほかの教科に広く活用することができるのです。読めて、分かるようになれば、どの分野のこともわかるようになるのです。算数や数学であっても、公式なり、決まりごとがどんな意味を持つのかを理解することができれば、広く問題に応用することができるのです。ここが単なるパターン演習では身に付けられない力なのです。パターン演習で得られる点数には限界があります。しかし、しっかりと読む力や理解する力を備えれば、あと10点を取ることができるのです。そのあと10点をとる力は国語を学ぶことで取れるようになるのです。しかし、国語の学びに対して誤解を持っている限りではその力は身につけることができません。王道を通ること。広く活用できる力を身につけるための国語の学びには王道を通るしかないのです。国語の学びはテクニックの習得ではありません。多くの児童・生徒たちがテストのための勉強、職業選択のための勉強に陥って大切なことを見失っています。そのことに早く気づかせることがこれからの教育産業の責任なのではないかとも思っています。

国語なんてどうして勉強するのか。そんなことをお子さんたちに聞かれたらどう答えますか。これまでの7つの話を読んでいただければこんな回答を用意することができます。「勉強するために、国語を勉強するのよ。」どうでしょうか。ちょっとは含みのある回答をお子さんに伝えることができるかもしれません。私は子どもたちにそう伝えていきます。ここまで読んでくださいます。ありがとうございます。(了)

文責：めがね先生

## ★☆☆☆★☆☆☆★☆☆☆★6月のおめでとう★☆☆☆★☆☆☆★☆☆☆★

1年1年の成長を自分は分からなくても人は見えています。お誕生日おめでとうございます。

☆拓希くん      ☆安祐美さん

お誕生日は子育てをしてくださるお父さん、お母さんへの感謝の日でもあります。お子さんの成長を喜ぶとともに、感謝申し上げます。

## ★★6月の予定★★

### ①とりあえずイベント日程です

「東京都内“パッと”する大学めぐりツアー」は7月1日(日)、「こはらの Summer Theater」は7月22日(日)で調整していきたいと思えます。具体的な内容は近日中にお知らせを配布いたします。どちらも子どもたちに「何かが残るもの」になるはず。ふるってご参加ください。

## ②中学生学力テスト

今月は5教科受験となります。範囲は別紙にてご確認ください。今月の学力テスト受験最終日は6月20日(水)です。事前課題プリントの確認をしっかりと行ってテストに挑戦しましょう。

## ③中学3年生北辰テスト

6月17日(日)は中学3年生の北辰テスト[第2回]の実施日です。十分に勉強してテストに臨みましょう。北辰テスト[第3回]は7月15日(日)です。受付は6月14日(木)～25日(月)です。ぜひテストを活用して、勉強の指針にしていきましょう。

### ★★今月の「この一問!」★★

今月は国語の問題です。チャレンジしてみてください。答えは教室で!

次の1～5の文の( )には、「ある」に関係する言葉が入ります。例にならってひらがなで答えなさい。ただし、それぞれの言葉は、[ ]内の字数になるものとします。

例 研究室には(あり )実権道具がそろっている。[7] ……答 ありとあらゆる

1. 彼は(あり )体力を武器に、精力的にケンキュウに取り組んだ。[5]
2. 父は(あり )の材料で、ちょっとした夜食を作るのがうまい。[5]
3. 写真を見ると、先生の(あり )日の姿をしのぶことができる。[3]
4. 事件の真相を(あり )に語った。[5]
5. なんとか知らせようと思って(あら )の声を出して叫んだ。[6]

(とある私立中学の入試問題より)

### ★★大人のための「この一冊!」★★

#### 夏目漱石「硝子戸の中」(新潮文庫)

このコーナーで取り上げる著作を探するとき、いくつかの考えがあります。中でも最も注意しているものは、読みやすさということです。その点を除くと、もっと紹介できる著作の幅も広がるのですが、人に紹介する以上、読んでいて苦痛を与えてしまうのでは申し訳ないので、なるべくなら最近書かれた一般向けのものを紹介しております。

しかし、今回は最近書かれた著作ではありません。夏目漱石という明治の文豪の作品をご紹介します。漱石には多くの作品がありますが、あまり知られていないかもしれません、私はこの作品が一番お気に入りです。

「硝子戸の中」と書いて「ガラスどのうち」と読みます。これは夏目漱石の随筆です。小説ではありません。読みやすいかという、明治時代の文章ですので若干の苦痛は伴うと思います。でも、いろいろな場面で、私が好きな夏目漱石の作品として紹介しています。ぜひ、このIDOBATA会議でも紹介しよう今回取り上げました。

この作品との出会いは私が高校3年生のときでした。やはり紹介によってです。高校時代の国語の先生からぜひ読んでと言われ、読んでみました。当時の私には難解、苦痛のともなうものでしたが、時代がたって、大学時代、そして働き始めてから数回読んでいくうちに、夏目漱石の明治知識人らしい教養深さ、人が生きるということとはいうことをよく考えた奥深さがわかってきました。文章も夏目漱石らしくお作法に従ったもので、日本語が乱れている(とっていいのかわかりませんが)今日の書き物に比べるとある意味において読みやすいのではないのでしょうか。

本作品は、夏目漱石の晩年に書かれた最後の随筆です。その後小説は書きますが、随筆はこれが最後となります。自分がいつ死ぬのかは分からなかったでしょうが、人生の終盤に差しかかって彼が書いたものは、「死」「時」というテーマでした。今回はこの一節をご紹介します。深く傷ついた女性が夏目漱石のところに相談をしにきた場面の文章です。

「もし生きているのが苦痛なら死んだら好いでしょ」

こうした言葉は、どんなに情なく世を感ずる人の口から聞き得ないだろう。医者などは安らかな眠に赴むこうとする病人に、わざと注射の針を立てて、患者の苦痛を一刻でも延ばす工夫を凝らしている。こんな拷問に近い所作が、人間の徳義として許されているのを見ても、如何に根強く我々が生の一字に執着しているかが解る。私はついにその人に死をすすめる事ができなかった。

その人はとても回復の見込みのつかない程深く自分の胸を傷つけられていた。同時にその傷が普通の人の経験にないような美しい思い出の種となってその人の面を輝かしていた。

彼女はその美しいものを宝石の如く大事に永久彼女の胸の奥に抱き締めていたがった。不幸にして、その美しいものは取も直さず彼女を死以上に苦しめる手傷その物であった。二つの物は紙の裏表の如く到底引き離せないのである。

私は彼女に向かって、凡てを癒す「時」の流れに従って下れと云った。彼女は若しそうしたらこの大切な記憶が次第に剥げて行くだろうと嘆いた。

公平は「時」は大事な宝物を彼女の手から奪う代りに、その傷口も次第に療治してくれるのである。激しい生の歓喜を夢のように暈してしまうと同時に、今の歓喜に伴う生々しい苦痛も取り除ける手段を怠らないのである。

私は深い恋愛に根ざしている熱烈な記憶を取り上げても、彼女の創口から滴る血潮を「時」に拭わしめようとした。いくら平凡でも生きて行く方が死ぬよりも私から見た彼女には適当だったからである。

長くなりました。しかし、きれいな文章です。読んでいて元気になる文章ではありませんか。どんな深く傷ついても時間がその傷口と傷の痛みを取り除いてくれるのです。こういう文章にもものすごく心揺さぶられてしまいます。当学院の『教室の葉』のあいさつ文に引用した「希望」について取り上げた魯迅の文章と同様に若い人に伝えていきたい文章です。いつも世話しく生活している中でも、ちょっとしたきっかけがありましたら、ぜひお子さんに語り伝えてみてください。お子さんを変える一言はそうそう簡単には見つかりません。お子さんの心を揺らす言葉はこういう名文の中にあるのかもしれない。

\*\*\*\*\*

#### 【編集後記】

最近、発行が遅くなっております。深くお詫び申し上げます。

さてだんだんと夏の暑さが感じられ始めてきました。今年も夏が来るのです。夏…今年も節電を心がけないといけない空気が漂い始めています。もしかしたら、計画停電という可能性も…。そんな空気を感じてはいますが、昨年経験から節電も計画停電もなんとか乗り越えられる、あるいはこのような生活を何十年も前の日本人は日常として受け入れてきたのではないかとも思います。ということで、本年度も『夏の講座』を開講いたします。講座内容、時間割などは今月中にお知らせいたします。何かご要望がございましたら、小春学院までお申し付けください。

